

図表① 高校教諭のためのシンポジウム
(2011年8月2日)

●プログラム

●挨拶 望月孝美(株式会社 学研教育みらい 学力開発事業室室長) 大堀雄作先生(京都大学高等教育研究開発推進センター教授)
●討議(10:10~12:00) ①開会=大学生研究フォーラム第2部の趣旨説明と経過 大堀精一(月刊情報誌「学研・進学情報」監修)
②メッセージ「高校教諭のためのシンポジウム」への期待と提起 溝上慎一先生(京都大学高等教育研究開発推進センター准教授)
③「大学生研究フォーラム2011」登壇からのメッセージ 浦坂純子先生(同志社大学社会学部教授)
④質疑応答 中原淳先生(東京大学大学総合教育研究センター准教授)
⑤質疑応答 大堀精一先生(月刊情報誌「学研・進学情報」監修)
昼食休憩(ランチタイムミーティング)

第1部

●東日本大震災への緊急アピール 佐藤忠司先生(宮城県立気仙沼高校進路指導部部長)
●高校現場からの報告(13:30~17:00) ①「生徒の成長の契機とキャリア教育のありかた」 三浦隆志先生(岡山県立勝山高校教頭)
②「『考えること』と『感じること』~被災地からのメッセージ」 村上育朗先生(岩手県花巻東高校教頭)
③2つのレポートに対する質疑応答 休憩
●パネル・ディスカッション 「高校における学業・キャリア形成と大学への架橋」 村上育朗先生 三浦隆志先生 奥村弘史先生(滋賀県立膳所高校進路指導主事) 鈴木徹也先生(埼玉県立総合教育センター教育主幹兼任主任指導主事) 司会=大堀精一 ●総括と閉会の言葉 溝上慎一先生

第2部

方の力になればと考えてきました
が、逆に先生方に励まされました
(大堀)。
8月2日、京都大学百周年記念
ホールに集った高校の先生方は、
北海道から九州まで111高校1
56名(当日の会場受付を除く)。
岩手、宮城、福島など被災地から
もご参加いただいた。

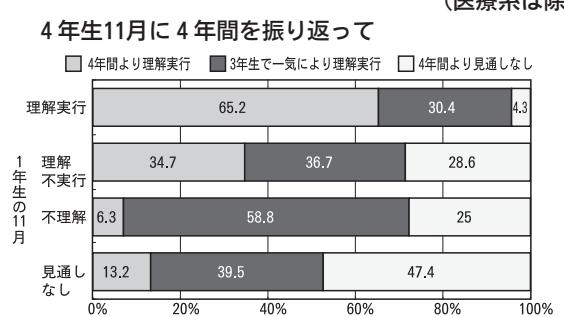
将来意識が効く
大学以前の
学生調査から実践に何を伝えるの

かー『大学生のキャリア意識調査
2010』の結果を踏まえて」と
題し、調査報告と共に、労働経済
学や教育学などからの活発な議論
が繰り広げられた。(詳細は電通
教育英会HP <http://www.dentsu-iueikai.or.jp> 参照のこと)
これら的内容を継承しつつ行わ
れたのが「高校教諭のためのシン
ポジウム」である。第1部「討議」、
第2部「高校現場からの報告」と
いう構成で行われた(図表①)。

第1部では「大学生のキャリア
意識調査」を実施した溝上准教授
が、シンポジウムへの問題提起も
して、溝上准教授はまず「受験と学力」
についてコメント。「京大でも自
らどんどん勉強できる学生はせい
ぜい1~2割程度です。残りの8
割は与えられることしかできてい
ません。他の旧帝大も同様です」。
また「大学生のキャリア意識調
査2007追跡2010(現在4
年生対象)」の結果の中から、「2
つのライフ(将来への見通しとそ
の実行)」についてこう説明した。
「大学1年生の時に『理解実行』
していた学生は、4年生11月に4
年間を振り返ったところ、「4年間
より理解実行」していた学生の割
合が65・2%と、非常に高い割合
だったことが明らかになりました。
一方、1年生で「将来への見通
しがなかった学生」は4年生でも
『見通しなし』が47・4%と最も
多く、「3年生で一気に理解
実行」は39・5%という結果です
(図表②)。「3年生で一気に理解
実行」とは就職活動が契機という
ことです、こうした学生たちは
3年間、だらだらと無為に大学生
生活を送っていることになる。果た
してこれでいいのか、と問いたい
のです。

こうした学生の背景には「高校
までの基礎」があります。その一
つが「学力」であり、もう一つが
『将来への真剣度』です。将来を
しっかり考える学生は科目の取り
組みが違う。例えば京大でもボ
ケット・ゼミという1年生対象の
演習科目がありますが、申し込ま
ない学生もいる。大学が良い教育
プログラムを作っても乗って来な
いのです。一方で、高校で『なぜ
大学に行くのか』を真剣に考えた
学生は、その取り組みが大学生活
にものすごく効いてくると考えら
れます」。

図表② 1年生が4年生になってどうなっている?
(医療系は除く)



特集

高校と大学が接続を目指し 高校生の学びとキャリアを議論

大学生研究フォーラム2011& 高校教諭のためのシンポジウム



毎年夏、京都大学で行われてきた大学
生研究フォーラム。本誌でもその模様を
継続してレポートしてきたが、今年は初
めて2日目に「高校教諭のためのシンポ
ジウム」が併催され、全国から多くの高
校現場の先生方が京都大学に詰めかけた。
シンポジウムのテーマ「高校の学びとキャ
リアを大学との接続で考える」はどこま
で明らかになったのか。シンポジウムの
模様をレポートした。

▲第1部「討議」で会場から質問する高校の先生
今年で4回目を迎えた大学生研
究フォーラムが新たな展開を見せ
た。その一つは京都大学高等教育
研究開発推進センターと公益法人
電通育英会に加え、新たに東京大
学総合教育研究センターが共
催に加わったこと。もう一つが
「高校教諭のためのシンポジウム」
(以下、シンポジウム)。協力／学
研教育みらい)の併催である。
シンポジウムの構想が生まれた
のは昨年の秋のこと。大学生研究
フォーラムの中心を担ってきた溝
上慎一・京都大学高等教育研究開
発推進センター准教授と本誌監修
の大堀精一との雑談で、フォーラ
ムへの高校教諭の参加が「一桁」
に止まっていることが話題になっ
た。

「大学生研究フォーラムは大学
生がどんな日常を送り、人間形成
を行つて社会に出るのかを実証的
に考察する、素晴らしいフォーラ
ムです。それが高校現場で知られ
ていないのは実にもつたない。
そこで高校への呼びかけを申し
出たところ、溝上先生から『ただ

含めたメッセージを語った。
溝上准教授はまず「受験と学力」
についてコメント。「京大でも自
らどんどん勉強できる学生はせい
ぜい1~2割程度です。残りの8
割は与えられることしかできてい
ません。他の旧帝大も同様です」。
また「大学生のキャリア意識調
査2007追跡2010(現在4
年生対象)」の結果の中から、「2
つのライフ(将来への見通しとそ
の実行)」についてこう説明した。
「大学1年生の時に『理解実行』
していた学生は、4年生11月に4
年間を振り返ったところ、「4年間
より理解実行」していた学生の割
合が65・2%と、非常に高い割合
だったことが明らかになりました。
一方、1年生で「将来への見通
しがなかった学生」は4年生でも
『見通しなし』が47・4%と最も
多く、「3年生で一気に理解
実行」とは就職活動が契機という
ことです、こうした学生たちは
3年間、だらだらと無為に大学生
生活を送っていることになる。果た
してこれでいいのか、と問いたい
のです。

こうした学生の背景には「高校
までの基礎」があります。その一
つが「学力」であり、もう一つが
『将来への真剣度』です。将来を
しっかり考える学生は科目の取り
組みが違う。例えば京大でもボ
ケット・ゼミという1年生対象の
演習科目がありますが、申し込ま
ない学生もいる。大学が良い教育
プログラムを作っても乗って来な
いのです。一方で、高校で『なぜ
大学に行くのか』を真剣に考えた
学生は、その取り組みが大学生活
にものすごく効いてくると考えら
れます」。

高大接続が叫ばれるものの、高
校と大学が全国的な規模で議論す
る場はそうない。しかも日本を代
表する東大・京大の共催である。
高校では送り出した生徒が大学
でどんな学びをしているのかほと
んど伝わっていないし、大学でも
入学以前の学生についての情報は
少ない。そこで両者を「つなぐ場
所」として企画されたのが、この
シンポジウムなのである。
ところがそのなか、3月11日
に東日本大震災が起る。シンポ
ジウムで「岩手県沿岸5校の取り
組み」の発表をお願いしていた村
上育朗先生(岩手県花巻東高校教
頭)はじめ、多くの太平洋沿岸地
域の高校が被災し、一時はシンポ
ジウム開催も危ぶまれた。
3月25日に花巻でお会いした
村上先生は『自分は京都に行く』
と明言されました。だから今日が
あります。少しでも被災地の先生
にものすごく効いてくると考えら
れます」。

話を聞いて帰るだけでは申し訳な
い。2日目に高校の先生方の交流
を図っては?と提案いただきま
した。そこで高校に呼び掛けたと
ころ、予想以上の賛同をいただい
たのです」と司会の大堀は冒頭で
報告した。

高校と大学 つながりを目指す

話をして帰るだけでは申し訳な
い。2日目に高校の先生方の交流
を図っては?と提案いただきま
した。そこで高校に呼び掛けたと
ころ、予想以上の賛同をいただい
たのです」と司会の大堀は冒頭で
報告した。



村上育朗先生



佐藤忠司先生

■**大学と高校の
「違い」を知る**

最後のパネル・ディスカッション

に有効であると三浦先生。今後は「キャリア教育の体系化と、指導と評価の一体化が高校でのキャリア教育をさらに豊かなものにすると思います」と結んだ。

続いて花巻東高校教頭の村上育朗先生が「考えること」と『感じること』～被災地からのメッセージ』と題して発表した。

「3月11日14時46分。あれから世の中が全く変わりました。9・11が世界を変えたように3・11は日本を変える。日本人がこんなに真剣に日本のことを考えたことは戦後無かったと思います」。被災の経験を振り返り、村上先生は切々と訴えていく。

「私は祖母から『一日一生、今生の別れ。これが見納めだ』と子どもの頃から言わされてきました。その意味が震災で実感されました。

浦坂教授は「学生たちは社会への関心が非常に低い。そこで、生徒が社会へ関心を深められるよう、各教科でも社会的な出来事を取り上げてほしい」と語った。また、中原准教授は外的キャリア（就職や昇進）と内的キャリア（充実感や成長感）の二つの観点に立ちながら、「東大に入れば就職や人生が安泰という時代は完全に終りました。これからはなぜ学ぶのかへの取りあえずの答えと、知識に加えて『経験』が問われます」とア

午後の部は宮城県立気仙沼高校

進路指導部部長の佐藤忠司先生による東日本大震災への「緊急アピール」でスタートした。

「まずは全国の皆さんからご支援を賜ったことにお礼を申し上げたい。その一念で京都に馳せ参りました」。今回の被災地の大きな特徴は、日本の食糧生産地であり、過疎地域だということ。進路の人間として生徒たちに『何とかこの状況を打開しなければ』と話しますが、『先生、そうはいっても仕

事する場所ないよね』と言われ答えに窮してしまいます」「地域の活性化が無ければ、この震災を乗り越えていくことはできません。それを支える若者たちの一歩を支えたい。復興まで長い年月がかかりますが、よろしくお願ひします」。

佐藤先生の言葉に、会場は満場の拍手で応えた。

続く「高校現場の実践」として初めて発表したのは、岡山県立勝山高校教頭の三浦隆志先生である。

「生徒の成長契機とキャリア教育のあり方」と題して前任校の岡山操山高校と現勤務校の勝山高校の2校の取り組みを語った。

ドバイスした。

さらに、高校でのキャリア教育について浦坂教授は、昨年実施した「キャリア教育の現状に関する

セミナーを述べた（中原准教授は当初のプログラムには入っていないかったが急遽参加）。

中原准教授は「学校だけで生徒に将来への動機づけを図るのは難しい。そこで社会人など異質な他者との出会いが必要です。ただし体験学習では必ずリフレクション（振り返り）を」と具体的な方策を語っていた。

緊急アピールと 高校での実践報告



三浦隆志先生

この後に何が起きるのかなんて誰もわからない。明日生き続けられる保証なんて何もないんです」。

「陸前高田では市の指定した避難所に行つた人たちはみんな死んでしまった。生き残ったのは人の言ふ事を聞かない、『自分で判断した人たち』です。マニュアルを作るとほど、人は判断できなくなる」。

亡くなつたご親族、避難所でのそれらを踏まえ、若者をどう育てるべきか、村上先生はさらに根源的な問いを重ねた。

「避難所での中高生は立派でした。例えば『自分たちはいいから、ますお年寄りに毛布を!』と。一方で、『することがないから、プリントを下さい』と頼んだ東北大志望の受験生がいた。同級生が行方不明の親を必死で探しているのに思いが至らない。そんな学生が大学に入ってきたらどうなりますか？ キャリア教育ってそういうことじゃないでしょうか？」。

岡山操山高校は「確かな学力、豊かな心、高い志、文武両道」という教育目標を掲げ、「単位制の導入」や「速度別授業の導入」など授業改善を行ってきた。また、

「総合的な学習の時間」（未来航路

プロジェクト）では1年次に弁論大会やディベート大会、職業研究、学部・学科研究、2年次に韓国・東京への修学旅行や倉吉高東高校による国際高校生フォーラムに参加するなど多様な実践を行っている。

三浦先生は「詰め込みではない学力の保証と、受験学力だけではなく、内発的な進路意識の醸成を図っていました」と振り返った。

一方、勝山高校は商業科と普通科が併設されている。「従来から

商業科では一校一品運動など地域との交流を活発に行つてきました。また普通科は勉強指導に力を入れると同時に、進路学習として地域の『達人』を呼んで話をしてもらうなど、プロジェクト形式での探求活動に取り組んでいます」。

今年からは「生徒が地元・真庭市を基盤に社会について考える」と目的に「キャリア教育推進室」を設けた。今は「総合的な学習の時間」を充実させるべく、キャリア教育推進室と進路指導部がコラボレーションし、「夢現プロジェクト」が進行中である。

以上の事例から高校では「総合的な学習の時間」がキャリア教育



奥村弘史先生

一方、埼玉県立総合教育センター教育主幹兼任主任指導主事の鈴木徹也先生は、教育行政の立場からコメント。「新しい学習指導要領では、高校におけるキャリア教育がきちんと位置付けられています。本県でのキャリア教育を見ていると、まだまだ内容は各校独自の取り組みに任せられています。それよりも今の課題は児童生徒の学力向上とベースをきちんとさせることであり、キャリア教育の発展はこれから、というところです。

教科指導をきちんと行うこととは、生徒の適性や興味関心を伸ばすことにつながるので、決してキャリア教育に遅れを取ることにならないと思います。また、高校では生き方・あり方教育を道德教育として進めしており、これが将来の職業観・勤労観につながります。

こうした基本の上に、各高校が生徒のあるべき姿を考えて教育課程を弾力化、多様化していくことが大切だと考えています。管理職

図表③ 会場で聞いた、高校の先生方の声

北海道	●高校現場も学問の面白さを中心に行き渡りの研究をしているが、もっと大学側も力を入れてほしい。高校段階では一部の生徒を除いて、深く学問を追究する面白さは基礎知識が無いためにわからない。志望校に合格するために一生懸命勉強し、部活動や本を読んだり、と日常に忙しい。その中で学問の面白さを追究する時間的な余裕は乏しい。オープンキャンパスも全てには参加できない。
岩手	●内的キャリアと外的キャリアの話が興味深かった。これからは自分が仕事をしている充実感が重要ではないか。大震災後、特にそれを強く感じている。
山形	●参加している先生方のモチベーションが非常に高いと実感した。生徒同様、教員もきっかけがあって勉強を始める。トップ大学だけでなく、地方の大学の事例もあるとなお良い。
宮城	●高校の中を見ても本校のように国公立大への進学から就職まで幅広い進路選択を行うところもあれば、比較的大きな進路選択を行うところもある。キャリア教育もこうしたギャップを自覚しながらやっていくことが大切。京大のように質的に均一と見える大学でも悩んでいることがわかっただけでも意味があった。
埼玉	●キャリア教育を切り口にして、もっとこの国や子どもたちの将来を考えていく必要を感じた。
愛知	●高校の教員は、生徒を「天塩にかけて育てている」という感覚がある。それが大学に進学後、「半分の学生は問題がある」というのは衝撃。高大接続というが、互いの壁を取り払うのが大切。
三重	●今まで、目の前の生徒しか見ておらず、大学に入った後にさらにどうなっていくのか、なかなかイメージできなかつたし、する余裕も無かつた。しかし今回のシンポジウムで大学進学後の姿について具体的に話を聞くことができて、「生徒の今後」を意識しなければいけないと思った。
三重	●大学は基本的には研究機関。高校でのやり方を大学にもつなげる、というのが難しいことは無理で、互いは全く違うことがわかった。高校と大学の役割分担が必要。例えば、大学に入ると専門が同じなので学生の志向も似た傾向があると思うが、高校ならば価値観の違う生徒たちの中で、どう自分の位置を見つけてやしていくのかを考えることができる。これは将来、働いてからも大きな力になると思われる。発達段階の観点からもその意味があると、再発見できた。
京都	●大学も大変やな、というのが正直な感想。私たち高校教員が抱えている不安やキャリア教育以前の「しつけ」レベルの問題についても、日本の一流大学が同様な悩みを抱えていることには、共感てきた。ただ大学には「キャリアセンター」のように専門的にキャリア支援を扱う部署があるが、高校では全教員が正課教育もやり、キャリア教育もやり、部活動もやり、成果を求められる。それがベストな体制なのか、考えていく必要があり。一方、溝上先生が言うように、与えられなければ何もできない学生の姿を聞くと、高校でここまで与えていいのかが難しいと感じられた。
岡山	●個人的にはこれまでキャリア教育という言葉に拒絶反応に近いものを持っていた。しかし今日、村上先生の話を聞いて腑に落ちた。まずは「生きる力」というベースがあって、そこから「学びはどうか」「仕事はどうか」と生徒たちに投げかけていくのがキャリア教育の一歩だと思えた。敢えて「キャリア教育」と言わなくとも、正課授業でも部活動でもそこへしていく必要がある。
広島	●高校では生徒を大学に送りだして終わる面の大きい。大学選びも、現実的に「偏差値」や「通学の便」が中心で、深く考えていない場合もある。もっと高校で深く考えさせていかなければ。
徳島	●今までではキャリア教育のために、生徒を研究機関に連れていったり、社会人に話を聞いたりしてきた。これらはあくまでも手段。教員が授業でしっかりとやっているのが一番のキャリア教育と感じた。
熊本	●研究の対象として教育を見ることは、僕らから見るとかがい面もある。高校では数値化されないものが優先される。ただそれが大学と高校の立場の違いであり、必要な観点だと思われた。

は『育てたい生徒像』をはっきりさせるべきだと思うのです。さらに鈴木先生は今後の教育について自身の考え方をこう述べた。「今、日本の財政赤字は相当深刻です。そういう日本でどう生きて

いくのかをもっと真剣に考えなければいけない。さらに、先生方の生き様から生徒と共に考えていかなければいけない。先生方を教員が生徒と共に考えなければいけない。さらには、先生方の生き様から生徒が将来をイメージする。それもキャリア教育です」。

以上のように、高校の先生方が語るキャリア教育觀は多様である。実際、高校では様々な実践の中での生徒の人間性や社会性と共に、将来への意識が育成されている。ただし「大学の先生方が言うキャリア觀や学生の姿と、我々が実践している部分は違っているというものが率直な感想です」(三浦先生)というように、キャリア教育については大学と高校の認識の違いも鮮明になった。

これらを踏まえ、溝上准教授はシンポジウムをこう締めくくった。「先生方は『わざわざキャリア教育と言わなくても、将来を考えるために取り組みはしている』と言いました。しかしやはり、『キャリア』と言わなければいけない範囲はあります。将来の見通しや社会人基礎力につながる技能、基礎力、コミュニケーション能力、思考力、社会性:これらはキャリア教育をやつてもそこが評価される機会がほとんどないことです。ところが大学では学習は当然で

すが、就職を入口にしながら社会で強く生きていけるのか、そういう力を大学でつけているかを示せるのか、アカウンタビリティ(説明責任)が求められています。現実にはこれらを示している大学はごくわずかで、就職に偏ってはいますが、大学が抱えるひつ迫感は高校とは大きく違います」。

「こうした『大学と高校との違い』を認識していくことは非常に大事だと思いました。例えば大学は学生の人格の奥深い部分を育てる力はありません。むしろ高校での教育が大きくモノを言います。このように互いの違いを踏まえ、高校は高校、大学は大学での取り組みをしっかりと考えるべきでしょう」。

それぞれが目指すべきキャリア教育は何か、高校と大学はどう連携していくのか。今後の議論をさらに注目していきたい。(2012年の大学生研究フォーラム&高校教諭のためのシンポジウムは8月19日・20日に開催される。全国の高校の先生方が今年以上に多く参加されることが期待される。)

(取材・構成／福永文子)